第10課　聖霊、御言葉、祈り

【暗唱聖句】

「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」ローマ8:26～27

わたしたちの言葉にならない祈りを、内なる聖霊がとりなしてくださるというみ言葉は本当に驚くべきものです。どのように祈ったらよいのかわからなかったり、祈る気力もないというような状況において、主の御霊が父なる神にとりなして下さっているというのです。考えてみれば、主はわたしたちの必要をはじめからご存じです。祈る前から必要を知っておられるのです。だから、実は安心してお任せしていればよいです。そして、わたしたちはただ神の国と神の義を求めればよいでしょう。

【今週のテーマ】

真の霊性は祈りなくしてはありえません。では霊的な祈りとはどのような祈りでしょうか。いま祈りの生活のリバイバルが求められています。

【日曜日　神に喜ばれる祈り】

神様に喜ばれる祈りとはどのような祈りでしょうか。

「あなた方が私につながっており、私の言葉があなた方の内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」ヨハネ15:7

叶えられる祈りの条件の一つがここに書かれてあります。それはいつも主につながっていることです。具体的に聖書の言葉にいつも生きていることです。そのときわたしたちは何でも求めても良いと言われているのです。主と一つに心が通い合うとき、わたしたちの思いや願いは主の思いや願いと一つになっていきます。だから、わたしたちが祈り求めるものは自然に主が願っておられるものと同じになっていきます。これは御心にかなった願いであるがゆえに、驚くべき御業をもってかなえられていきます。

神様に喜ばれる祈りとは、神様を中心とした祈りということです。神様の視点で物事を見るようになるならば、わたしたちの人生全体も神様の目を通して見えるようになってくることでしょう。このような神様との麗しい関係の中で、時にわたしたちの個人的な必要や願いを申し上げることも良いでしょう。主は喜んでわたしたちの願いに耳を傾けてくださることでしょう。「祈りは神を私達にまで呼び下ろすのではなく、私達を神様のもとへ引き上げるのです」（キリストへの道）ものです。非常に厳粛なことであり、また神の子に与えられた大いなる特権です。

【月曜日　聖書的祈りの基礎‐神に求める】

わたしたちはなぜ、主の願いを祈り求めることができるのでしょうか。それは主は求めなさいと言ってくださっているからです。

「そこで、わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」ルカ11:9

キリストは「求めなさい、そうすれば与えられる」と言われている以上、わたしたちはそれを信じなければなりません。

「だから、言っておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。」マルコ11:24

そもそも神様は私たちが祈り求める前からわたしたちの必要を御存じです。そしてそれを与えてくださると言われている以上、それを疑う理由はないのです。だから、祈ったらならばその瞬間すでに得られたと信じることが求められています。これは神様に対するわたしたちの信頼の証です。

貧しかったAさんは、お金持ちのBさんから子どもの教育資金を提供しましょう。安心して大学に行かせてあげなさいというありがたい申し出を受けました。Aさんはどれほど喜んだことでしょう。ところが、やがてBさんの申し出を100％信じても良いのだろうか。途中から止めたと言われては困る。そこでBさんに覚書のようなものを書いてくれるように頼んだのでした。ところが、覚書を書けと言われたBさんは自分の言葉を信頼していないAさんに憤慨し、話はそこでなくなってしまったのでした。神様に対しても信頼することが大切です。使徒ヨハネもこのことについて手紙に書いています。

「何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既にかなえられていることも分かります」第一ヨハネ5:14～15

神様には大きすぎて叶えることができない祈りはありません。しかし、わたしたちの側でも満たすべきいくつかのことがあります。それはわたしたちが主に対して従順であることです。

「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」イザヤ59:1，2

エレン・G・ホワイトは次のように言っています。「神がお与えになる賜物は、みな服従が条件となっている」（希望への光P1239）

【火曜日　聖書的な祈りの基礎―信じる】

祈りは単に求めるだけでは十分ではなく、求めたならば同時にすでに与えられたと信じなければなりません。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。」ヘブライ11:6

信仰がなければ神に喜ばれないと言います。具体的な信仰として神様は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを信じることです。これは「祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい」（マルコ11:24）という教えとも通じます。

「いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、主から何かいただけると思ってはなりません。」ヤコブ1:6、7

祈るときは、いささかも疑ってはなりません。神様が祈りに応えてくださるのは当然だと確信して祈らなければなりません。幼子のように単純に信じるのです。祈りの答えがすぐに来なくても、疑わず信じ続けましょう。祈りが忘れられることはありません。時は神様の御手の中にあります。もし疑うなら、揺れ動く海の波のように、いつも心は不安定です。これでは本当に神様を信じていると言えるでしょうか。心がふらふらしているときは、主から何かいただけると思ってはなりませんとさえ聖書は言います。

【水曜日　聖書的な祈りの基礎―神の約束を当然のものとして求める】

「何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既にかなえられていることも分かります」第一ヨハネ5:14，15

神様の御心にかなったいのりを神様は必ず聞き入れてくださいます。そのためわたしたちは祈ったことは必ず叶えられると信じて、祈りが実現する前からすでに与えられたと感謝を捧げていくことが求められます。感謝を捧げることによってさらに確信が強まり、心は平安になります。

「種は神の言葉である」ルカ8:11

み言葉は種です。み言葉を内に持つということはこれから大きく実る木の種を内に持っているということです。み言葉をたてに祈る時、今はまだ種でも必ずいつか芽を出し、やがて大きな実り、収穫のときを迎えることを確信することができるのです。イエス様はラザロをよみがえらせるときに、父なる神にこう祈られました。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します」ヨハネ11:41

まだそれが起こる前から、イエス様は願いを聞き入れてくださって感謝しますと祈っています。圧倒的な神様への信頼です。このようにわたしたちも祈ることが大切です。

【木曜日　聖霊を祈り求める】

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」ルカ11:13

祈りに対する神様からの最大の答え、プレゼントは聖霊です。つまり神様ご自身です。わたしたちがパンや魚、つまり日々の必要を求めるとき、主はパンや魚ではなく聖霊を与えようと言われました。わたしたちにとってこれ以上の祝福はないからです。聖霊の働きによってありとあらゆる必要は満たされます。ここで興味深いのは聖霊を求めていたわけではなく、パンや魚というありきたりな日曜な糧を求めていたのに、結果的にもっと素晴らしい聖霊が与えられることです。つまり、聖霊だけを個別に抜き出して求めるような、何か神秘的な体験を求めるように求めるものではなく、わたしたちの日々の糧や様々な問題など、毎日の生活に直結した出来事に対して救いを祈り求めていくとき、結果的に聖霊が与えられるということです。聖霊の神様はわたしたちの毎日によりそうように与えられるものなのです。もしここで問題があるとすれば、わたしたち自身が聖霊をお迎えする準備ができているかどうかです。聖霊がわたしたちの内に住んでくださるとき、わたしたちは自分自身を主に明け渡すことが求められます。明け渡すとは委ねるということです。